

## “竜の眼” — 資料と短信 —

### 沖縄における

### 「石敢当」変容の一事例

島村恭則<sup>※</sup>

沖縄における石敢当は、辻や三叉路、道の突き当たりや門などに設置される、「石敢当」とか「泰山石敢当」などという文字が刻まれた石の魔除けであるが、これについては、中国的習俗の沖縄への伝播と受容を研究する際の格好の素材として、窪徳忠 [1974; 1981] や下野敏見 [1989], そして周星 [1993: 5-25] の各氏が取り上げている。こうした研究の成果は、沖縄における石敢当習俗の歴史と現況とをかなり明らかにしたといえるが、本稿では、そうした成果を前提としつつ、これまでの研究では扱われてこなかった石敢当の変容の一事例について報告をすることとしたい。

窪徳忠 [1984: 5-20] によると、沖縄ではここ数年来、石敢当ブームとでもいうべき状況が続いており、石敢当の設置数は確実に増加の傾向にある。その場合、レディーメードの石敢当が石材店や大型スーパーで簡単に手に入ることや、石材店が熱心に訪問販売を行うこと、またユタ・三世相などが災因論の中で石敢当設置の必要性を説いたりしていることなどが、石敢当設置の契機になっているのだという。

ところで、筆者が取り上げるのは、沖縄根生いの新宗教における石敢当相当の信仰対象物である。沖縄では第二次大戦後、土着のシャーマニズムを基盤にしつつ、教祖が出現し、数学・組織を整えた新宗教がいくつか発生している。中でも大型なものとして龍泉（いじゅん）がある。龍泉は、昭和9年生まれの高安龍泉という巫的資質を持つ人物が昭和49年に設立したもの。琉球の主神だとするキンマンモンを祀り、沖縄の伝統を踏まえつつも、日本本土の宗教要素を多分に取り込んで教

※筑波大学大学院 歴史人類学研究科

えや儀礼的世界を構築している（註）。

龍泉において、石敢当に相当するのは、「龍宮宿星根本護法神守護」と彫られた石のプレートである。これは、彫られている文字こそ独特であるが、材質・大きさなどは近年石材店で見かける一般の石敢当と同様のもの。当教団の信者、あるいは定着信者ではないが教祖の講演を聞きに来たりするクライアントらが、必要に応じて、門や辻など、一般に石敢当を設置するのと同じ場所に設置している【写真1】。これに向かって礼拝をするというようなことはない。一枚1万5千円で、龍泉本山にて入手することになっている。教団側の説明では、毎月、15～20枚が購入されているという。

「龍宮宿星根本護法神」については、教祖によって次のような意味付けがなされている一。

「龍宮宿星根本護法神」は、教団主神のキンマンモンのもとに総括されている機能神の一つで、辻・門・トイレなどを守護する神であり、その名称の意味は、世界の根元（根本）である龍宮から出現し、人々の星めぐり（運氣）を司る神、というものである。巷間の石敢当は、中国からの輸入思想によって置かれている呪物であり、あれは神ではない。「龍宮宿星根本護法神」は、石敢当が沖縄に伝えられる前から存在している沖縄固有の神である。石敢当を設置する習俗は否定されるものではないが、本来、沖縄人は、沖縄人独自の根



写真1. 「石敢当」に相当する「龍宮宿星根本護法神守護」（那覇市内）

源世界たるニライ・カナイ＝龍宮から出現したこの神のほうを祀るべきなのである（平成2年12月、高安教祖より聴取。同様の言説は信者向け教学講義においても説かれているものである）。

さて、筆者は当教団についての、沖縄における参与観察調査を実施していた折り、この「龍宮宿星根本護法神守護」の石板の設置が決定される瞬間に出くわしている。次に、そのときの模様を紹介しておく。

平成3年1月9日、那覇市のある病院の竣工祭が執行された。この病院の院長の母親が龍泉信者で、竣工祭は龍泉の神官を司祭にしているものである。儀礼は所定の作法（修祓、祝詞奏上）が進められ、最後に神官らが屋外に出て、ヤナカジ（悪風＝邪気）などがぶつかるような箇所がないか点検。その際、神官のインスピレーションにより、大通りと病院の駐車場への通路とが交差する場所が、ヤナカジが一番受けやすい場所だと判明する。そこで、その場所に「龍宮宿星根本護法神守護」を設置するように指示【写真2】。その際、信者である母親は、神官に向かって、「わかりました。で、そのイシガントウはいつ（教団本部に）いただきに行けばよいでしょうか」と質問。それに対して神官側も、「イシガントウは今度の日曜日に取りにきてください」と応答。後日、この場所に「龍宮宿星根本護法神守護」が設置されることになる。

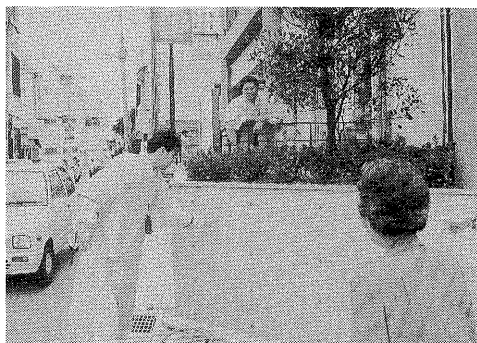


写真2. 教団の神官が「龍宮宿星根本護法神守護」設置場所を指示。右側の女性が信者。

当教団では、右のような形で、あるいは教団本部における個人指導（ユタのハンジ（判示）場面にも通じるところがある、信者・クライアントの悩み・問題に答える場）における災因論の一環として、「龍宮宿星根本護法神守護」設置が勧告されているのである。

右の事例で注目されるのは、信者の側は「龍宮宿星根本護法神守護」を石敢当と同様のものと認識しており、教団側もとりたててそれを否定しないということである。もっとも、理念的には教団側は石敢当との差異を主張しているのであり、実際、この石板を信者・クライアントに手渡す前には、必ず、本山の定例祭祀における火祭りのときに、護摩の火にこれを通し、魂を入れるということを行っている。そして、ここがスーパーでも買える石敢当とは違うところなのだと言っている。またもちろん、熱心な信者の場合には、さきに引用した教祖による意味付けの受容がなされていることは言うまでもない。しかし、そのような者は幹部クラスの者に限られているというのが実状のようである。次の事例は、「龍宮宿星根本護法神守護」が完全に石敢当と同一視されている事例である。宮古群島の伊良部島における外来宗教の受容について調査した津谷芳嗣氏の調査報告からの引用。

（龍泉の一島村註）伊良部での布教活動は見られないが、イジュンの石板を保持する家がある。すなわち、石敢當を数多く設置しているEさんの家では、その中に「龍宮宿星根本護法神守護」と記された石板があった。この由来、設置の契機を聞くと以下のような答えを得た。

「那覇にイジュンというユタの偉い人がいて、その人は横浜とかハワイとかにも行っているらしいのだが、石敢當と同じ働きをするものだと売られていたので購入し設置した。」

これは既存の慣習の中に新宗教が取り込まれた形であるが、何らかの新しい教えを実行していることの実現ではなく、ただ単に石敢當の機能の中に取まっているだけで存在して

いた。[津谷 1992:145]

「龍宮宿星根本護法神守護」の受容には、相当な幅があると見なければならぬ。が、とにかく沖縄では、石敢当は、今日においても新宗教の中に取り入れられ、その正確な受容はともかくとしても新たな意味付けを与えられて、再生産され続けているのである。

さて、ここで問題となるのは、隣国中国における石敢当の現代的展開の様相がいかなるもので、それは沖縄におけるそれとどのように類似し、また相違するのであろうか、ということであろう。これまでの石敢当の比較民俗学的研究は、どちらかというとその伝播のプロセスや、起源を考究することをめざして行なわれたものであった。しかし、一方で、現代における変容のありかたの比較研究も、各国各地域のそれぞれの民俗・民族文化や社会の特性の究明の上で役に立つものであろう。そうした課題に答えるケーススタディの一つとして石敢当変容の比較研究が行われるべきなのである。本稿は、かかる研究へ向けての一事例報告をめざしたものであった。

(註) 龍泉についての詳細は、拙稿 [1992] を参照されたい。

#### 【参考文献】

- 窪 徳忠 1974 『増訂・沖縄の習俗と信仰—中国との比較研究—』東京大学出版会
- \_\_\_\_\_ 1981 『中国文化と南島』第一書房
- \_\_\_\_\_ 1984 『石敢当からみた中国・沖縄・奄美』『南島史学』23:5-20
- 島村恭則 1992 「『琉球神話』の再生—新宗教『龍泉』の神話をめぐって」『奄美沖縄民間文芸研究』15:1-16
- 下野敏見 1989 『ヤマト・琉球民俗の比較研究』法政大学出版局
- 周 星 1993 「中国と日本の石敢当」『比較民俗研究』7:5-25
- 津谷芳嗣 1992 「外来宗教の受容」『文化人類学調査実習報告書』第9輯(沖縄県宮古郡伊良部町伊良部), 国際基督教大学:139-146

#### 新刊紹介

徐平著

#### 『羌村社会』

経済の急激な発展の中で中国の農村社会は大きく変貌しつつある。その膨大な村の数に比べると体系的なモノグラフは余りに少ない。これは著者が故郷、四川省阿坝藏族羌族自治州文川县羌鋒村で行った社区(Community)調査に基づき精細な民俗誌研究といえよう。博士論文として纏められ、中国社会科学博士論文文庫の一冊として刊行された本書を手にとると、中国の若手研究者の息吹が伝わってくる。七章だてで序説で方法と調査地の概況を紹介した後、経済

生活、社会構造、人生儀礼、精神世界、文化適応と変遷、未来に向かっての各章で村の民俗が記述されていく。あとがきに苦節二十年の結果とあり、村人への共感と感謝が述べられているのも著者の人柄を偲ばせる。中国社会科学院研究生院での講義の祈りの輝いていた目の著者をおもった次第である。(佐野 賢治)

A 5 版 275 頁 中国社会科学出版社  
1993 年 8 月 刊 精装版 14 元